

研究主題 **論理的思考力を育む文学教材の学習指導**
—— 学力と感性を育む授業を目指して ——

要約：本研究の目的は、現在の文学教材の授業が内包する課題を解決し、今日求められる国語の力を育成するための文学教材の授業(小学校)の在り方について考察し、学力と感性をともに育む文学教材の授業実践を実現することである。方策の1つとして、文学を論理的に読むことに着目し、試行実践を試みた。

キーワード：文学教材，論理的思考力，想像力，感性，学習用語，活用，系統性，伝え合う力
学習意欲，小学校国語

I 問題提起

第1章では、現在求められる国語の力とは何か、そして現在の文学教材の授業が内包する課題とは何かを問題提起として設定した。

学習指導要領とPISA調査の分析をもとに以下7項目を「現在求められる国語の力」として設定した。

- ①実生活で生きてはたらき、各教科・他単元で活用できる国語の力
 - ②論理的に思考し表現する力
 - ③互いの立場や考えを尊重して伝え合う力
 - ④言語文化に触れてはぐくまれる感性や情緒
 - ⑤基礎基本的な知識技能
 - ⑥物語の基本構造やレトリック等の作者の技法と主題の関係を読み取りそれを評価する「熟考・評価」の読解力
 - ⑦物語の主題を読み取る力と作品を批評する力
- 次に、授業づくりの課題、PISA調査と全国学力・学習状況調査からみる読解力と学習意欲の課題、子どもたちが抱える想像力や人間関係の課題をもとに、次の5つを「現在の文学教材の授業が内包する課題」として挙げた。
- ①学びの積み上げがされにくく、活用の意識がも

ちにくい

- ②論理的思考力がつきにくい
- ③想像力と伝え合う力の不足
- ④文学を楽しむ感性や情緒の不足
- ⑤国語への学習意欲の低下

求められる力と課題は、①と①、②と②、③と③、④と④、⑤と①、⑥と①②、⑦と①②と関連づけられ、課題⑤は全ての求められる力と関連している。

次に、「求められる国語の力を育成するために、今、なぜ文学なのか」を考察して主題設定の理由を明らかにした。

なぜ文学教材の授業は学びの実感と活用の意識が薄く、意欲が向上しにくいのかを考えた時、本来は論理的に思考しなければ読むことができない文学教材をイメージと感覚だけで読むことに偏ってしまっていること、本来、豊かな感性を育むために最も適している文学教材の授業で、想像力と思考力の低下から感動を味わうことができる子が少なくなっていることが挙げられる。

考察の結果、次の主題設定の理由が挙げられた。
○文学は論理的思考力を育成するのに適している。故に、論理的に文学を読む授業を実践すれ

ば論理的思考力が育成されるとともに、文学を味わうことにもつながる。そのことにより、国語への意欲の低下や学びの実感の薄さも改善されるから。

- 文学の豊かな表現を学ぶことで豊かな言語感覚や感性、想像力を育むことができ、今後の読書生活の充実や、人生を豊かに生きることにつながるから。
- 今日的課題である、「論理的思考力の向上」と「豊かな感性」の育成につながるから。

II 先行研究

第2章では、目指す授業の方策を示唆する2つの先行研究を挙げ、考察した。

1つ目の先行研究は、鶴田清司氏の『文学教材で何を教えるか』である。分析の結果、以下のように考察した。

言語技術的な内容を教えることに着目して実践を行うことが大切である。ただし、それに偏り過ぎないように留意し「作品を楽しむためのツールとしての言語技術」であることを念頭に置く必要がある。言語技術的な内容、作品を深く読み取ること、人間教育的な要素をバランスよく取り入れた実践を系統性に留意しながら行う必要がある。

2つ目の試行実践は、橋本武氏の『<銀の匙>の国語授業』である。分析の結果、以下のように考察した。

教えるのではなく考えさせる。興味や意欲を大切に追及させる意識をもって実践を行うのが望ましい。文学教材において基本事項は教えるものではなく、それを学ぶことが目的でもない。子どもたち自身が意欲をもって追究する中で見つけるものである、作品を豊かに味わうためのものである。それが子どもたちの「人生の糧」、実生活に生きてはたらく力となる。

III 研究仮説

第3章では、研究仮説として、文学教材の授業が内包する課題を解決し、現在求められる国語の

力を育成するためにはどのような実践を行えばよいかを考察し、実践に必要な要件を示した。

考察の結果、文学を味わい感性を育むことを基礎条件に、文学を論理的に読む授業を伝え合い重視で学びの積み上げを意識しながら実践すると、本稿で挙げた文学教材の授業の課題を改善することにつながり、求められる国語の力を向上させることに寄与することができるのではないかと考えた。それをもとに「課題を解決し、求められる国語の力を育成するための要件」を次のように設定した。

- ①論理的に主題を読み取る力を育成する手立てが必要である。
- ②主題や表現などを批評する力を育成する手立てが必要である。
- ③何を学んだかをはっきりさせ、系統的に学びを積み上げ、活用する力を育成する手立てが必要である。
- ④児童全員が参加し、関わり合い伝え合う力を育成する手立てが必要である。
- ⑤学びの必要感をもって文学を味わい楽しむための手立てが必要である、
- ⑥文学を楽しむための感性や言語感覚、想像力を育てる手立てが必要である。

これらの要件は、先に挙げた求められる国語の力と次のように関連している。要件①と力②、要件②と力⑥⑦、要件③と力①⑤、要件④と力③①、要件⑤と力④、要件⑥と力④

要件を満たすための実践の留意点は次の通りである。

- 学びの見通しをもちふりかえりをしっかり行うことで、既習を生かし学びを積み上げ活用する意識をもたせる。
- 作品を味わうために論理的に主題にせまる活動を工夫し、その過程で基礎基本を積み上げて活用できるようにする。
- 毎時間話し合いの時間を設けて伝え合う力を高め、学びを深める。
- 児童が必要感を持ち、積み上げてきた学びを活用して、学びの楽しさを感じられるような言語

活動を設定する。

○児童の感動を大切に、自分の経験と重ね合わせながら作品を味わう。

以上5点に留意して、要件を満たすための試行実践を行った。

IV 試行実践1

第4章では、要件を満たし、学力と感性をともに育むための、1つ目の試行実践についてその指導の実際と分析を示す。

試行実践1は金沢市立大野町小学校6年1組で「やまなし」の単元で行った。

要件を満たすための工夫を次に挙げる。

○物語の説明書を書く言語活動(要件①②③⑤⑥)

説明書は①設定、②クライマックス、③あらすじ、④すてき表現、⑤主題、⑥作品に対する自分の考え、この6項目で構成し、これは物語を読むスキル「読解6か条」として活用してきたものである。導入で「説明書を書くには、何が必要でしょう?」と問いかけ、既習をヒントに子どもたち自身で方法を考え、見通しをもつことができるようにした。

○学びの積み上げと活用(要件③⑤)

単元を通じて学びの積み上げと活用を意識する。課題を解き明かすために常に既習をヒントにして考え、週末のふりかえりで今日何を学んだのかをはっきりさせる。学習用語を中心に、「重要ワード箱(重箱)」に記録させ、活用できるようにした。

○ふりかえりの充実(要件③⑤)

1時間の授業や単元の終わりに、相互評価、自己評価によるふりかえりを取り入れ、子どもたち自身が学びをメタ認知することができるようにする。

○話し合い活動の充実(要件④⑤)

毎時間子ども同士の交流を取り入れることで、伝え合う力を育てながら学びを深め合うことができるようにする。

○ビブリオバトル(要件⑤)

児童が学びの必要感をもち、興味関心意欲を高

めて、楽しく学ぶための言語活動である。児童にお手本のビブリオバトルの映像を見せ、「物語を楽しみ、その良さを伝えるためにはビブリオバトルで何を言えばいいのか」を考えさせた。子どもたちは活動に興味を示し「ビブリオバトルで言っていること」と既習の「読解6か条」の項目がほぼ一致していること、チャンプになるには作品に対する自分の考えを自分の考えをしっかりと述べる大切であることに気付くことができた。

試行実践の他、児童対象のアンケート調査、他校6年生との比較実践等を行い、分析した。

結果、全ての要件において一定の成果を得ることができた。特に、要件③学びの積み上げと活用、要件④伝え合う力、この2点において大きな成果が見られた。課題として、次の2つが挙げられる。▲要件①②において論理的に主題を読み取る力、批評する力、表現の魅力を分析する力が不十分。そのため、スキルや学習用語など基本の習得に精いっぱいになってしまい、要件⑤作品を味わい楽しむこと、要件⑥感性や言語感覚、想像力を育てることがまだ十分ではない。

▲書く力と話す力が不十分。そのため、要件⑤を満たし、文学を楽しむための活動であるビブリオバトルを十分に楽しむことができなかった。

V 試行実践2

第5章では、試行実践1で課題として残った要件を満たすことを目指して試行実践2を「海の命」の単元で行った。試行実践1と2の間に「平和について考える」の単元でスピーチを、「『鳥獣戯画』を読む」の単元で絵の評論文の書き方を学んだ。読むスキルや重要ワード等の一人読みの基本についても、「カレーライス」「やまなし」の2単元の学びの積み上げで、慣れてきたようである。

要件を満たすための工夫に加えて試行実践1で残った課題を解決することを念頭に置いて指導を工夫した。

○論理的に主題を読み取る力の育成のための工夫

変容の因果関係をしっかりと押さえることが

できるよう、主題につながるポイントとなる叙述を読み解くための問いを提示して一問一答で考えさせることで、主人公の変容の因果関係を押さえることができるようにした。(なぜなぜ読み)

○評価する力、表現を分析する力を育成するための工夫

「わけは〇〇だからです」とどまらず、「〇〇のわけは△△だからです」「△△のわけは□□だからです」というように掘り下げていく「理由読み」を取り入れることで、根拠をしっかりととらえて作品の魅力を解き明かすことができるようにした。さらに、自分との比較、同一作者の他作品との比較、他作者の作品との比較しながら読むことで、その魅力を明確に捉えるとともに、想像を広げてその表現を味わうことができるようにする(比較読み)。

○作品を楽しむための工夫

他単元での話す力、書く力の積み上げにより、ビブリオバトルを楽しむことができるようにする。これは、今後の読書活動の充実にもつながっていく活動である。

○要件を満たすための指導の工夫

要件①…読解6か条を活用して評論文を書く、なぜなぜ読み

要件②…批評の視点、理由読み、比較読み。

要件③④…「重箱」による学習用語の積み上げ、ワールドカフェ等による話し合いの充実、ふりかえりや相互評価の充実。

要件⑤⑥…ビブリオバトルで物語を楽しむ。

実践の他、アンケートによる意識調査も行った。

結果、試行実践2は6つの要件をほぼ満たすことができ、学びの積み上げと活用、児童同士の交流を意識した実践をすることができた。その中で、論理的思考力や読解力などの学力、想像をふくらませて文学を味わい楽しむ感性を育む基盤を作り、学びの実感を得たことで学習意欲が向上するという成果を得ることができた。この成果は、今後の文学教材の学びや他単元、他教科での学び、日常の読書生活の充実につながるものであると言える。

VI 結論

第6章は、本研究の結論を述べる。

本研究で挙げた現在の文学教材の授業が内包する課題を解決し、現在求められる国語の力を育成するために、6つの要件を設定し、試行実践を行った。その結果、要件①～⑥全てを満たすことができた試行実践2において、学力も豊かな心もともに育む基盤となる授業を実践することができた。

○一人読みのための基礎基本(読解スキルや表現技巧など)を習得することが、読む力をつけ、感性豊かに作品を味わうための土台となる。

○物語を、根拠をはっきりさせたり比較したり、因果関係を考えたりしながら論理的に読むことで論理的思考力や熟考評価の読解力を鍛えることができ、物語を分析する過程で想像をふくらませたりその良さを味わったりすることにもつながる。

○基礎基本を習得したり論理的に読んだりする際には、それを「教える」のではなく「考え・気付かせる・発見させる」ことに留意する。スキル等の習得に比重を置き過ぎると、豊かに作品を味わうことがおろそかになってしまう。

○作品から受けた感動や、学びの積み重ねと活用によって得られる学びの実感は、児童の学習意欲を向上させる。

以上、本研究を通して以下のような結論に至った。

文学を味わい、豊かな感性を育てることを念頭に置いて、文学を論理的に読む授業を、伝え合いと学びの積み上げを重視して実践すると、本稿で挙げた文学授業の課題を改善することにつながり、求められる国語の力の育成に寄与することができる。

研究主題 不登校期の心理・行動の変容過程から得られる 今後の教育相談のあり方

要約：不登校を経験した母親へのインタビューを通して、不適応を抱えた際の心理的・行動的変容をモデル化した。不適応を訴える際には、「学校生活に不適応を訴える前の時期」「学校生活に不適応を訴える時期」「学校生活に適応していく時期」の3つの段階的時期が存在すること、その不適応を生み出す背景・要因は、主に3つ「幼少期からの家庭環境の問題」「家庭と学校における本人理解のあり方の問題」「学校環境の問題」があることから複合的要因であること、さらに不適応を乗り越える鍵となるのは外部機関との連携であることが理解できた。児童生徒が一日の大半を学校環境に身を置いていると考え、学校要因が多く存在するのではないかとする視点を持つことが必要であると判断される。そこで、不適応を生み出さないための学校、その他の外部機関が行うべき支援や対策を考え、今後の教育相談のあり方としてまとめた。

キーワード：不適応の段階的時期、複合的要因、外部機関、教育相談

I はじめに

不登校問題が我が国の重要施策としての対応を迫られる社会問題となっていることは誰もが知るところである。各自治体、各校での取り組みは進んではいるが、これといって即効性のある対応策は見られない。

不登校の背景・要因は、学校要因説と複合的要因説とする考え方があがるが、不登校の背景や要因が少しでも明らかとなり、取り巻く環境の相互の関連性が、ある程度掴めるのであれば、そして、不登校を学校の問題として捉え、学校教育のあり方を問う方向で考えていく視点を持つことができれば、各学校、各事例に応じた支援や対策、環境設定が確立されるのではないかと考えた。そこで、不登校経験者の母親へのインタビューを通して、その心理的・行動的変容をモデル化し、得られたモデル図から、学校や外部機関による適切な支援や対策について

検討を行うことを目的とする。

II 研究1

1 目的

不登校経験者の母親へのインタビューを通して、不適応を抱えた際の心理的・行動的変容をモデル化することで、不登校の背景・要因を明らかにする。

2 方法

・調査対象者 A市の教育支援センターに2009年から2011年において通室した児童生徒の保護者8名

・調査時期 2013年6月から9月

・調査手続き 1名につき1回、面接時間は約60分、半構造化面接を筆者が実施。文字起こしは日常的に関わりのない人物に協力依頼し匿名性が保たれるよう配慮した。参加者には個人情報やデータは研究目的のみに利用すること

と、データは分析後、完全消去し、本研究終了後に再生することや本研究以外の形で利用しないこと、また参加者のプライバシーを保護するため、個人情報は一切秘匿することなど説明し、署名・捺印を得た上で面接を実施した。デ

ータの分析には修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) を用いた。

3 結果

事例の概要及び M-GTA を用いたモデル図を以下に示す (Table 1, Figure 1)。

Table 1 事例の概要

本人	家族構成	不登校初期	不登校歴
A男 大学1年	父母・父方の祖母・兄2人	中学1年	中学校3年間
B男 中学1年	父母・弟2人	小学2年	小学校低学年～中学1年生
C子 定時制高校1年	父母・姉・父方の祖父母	小学2年の夏	小学2年生～中学3年生
D子 短期大学1年	父母・姉・母方の祖父母	中学1年の春	中学校3年間
E子 フリースクール2年	父母・兄・母方の祖父母	中学2年の1学期後半	中学2年生～3年生
F子 私立高校3年	父母・姉・父方の祖父母	中学1年の終わり頃	中学1年生～3年生
G男 公立高校2年	父母・弟2人	小学6年の夏休み明け	小学6年～中学3年生
H子 大学2年	父母・姉	中学1年	中学1年生の終わり～3年生

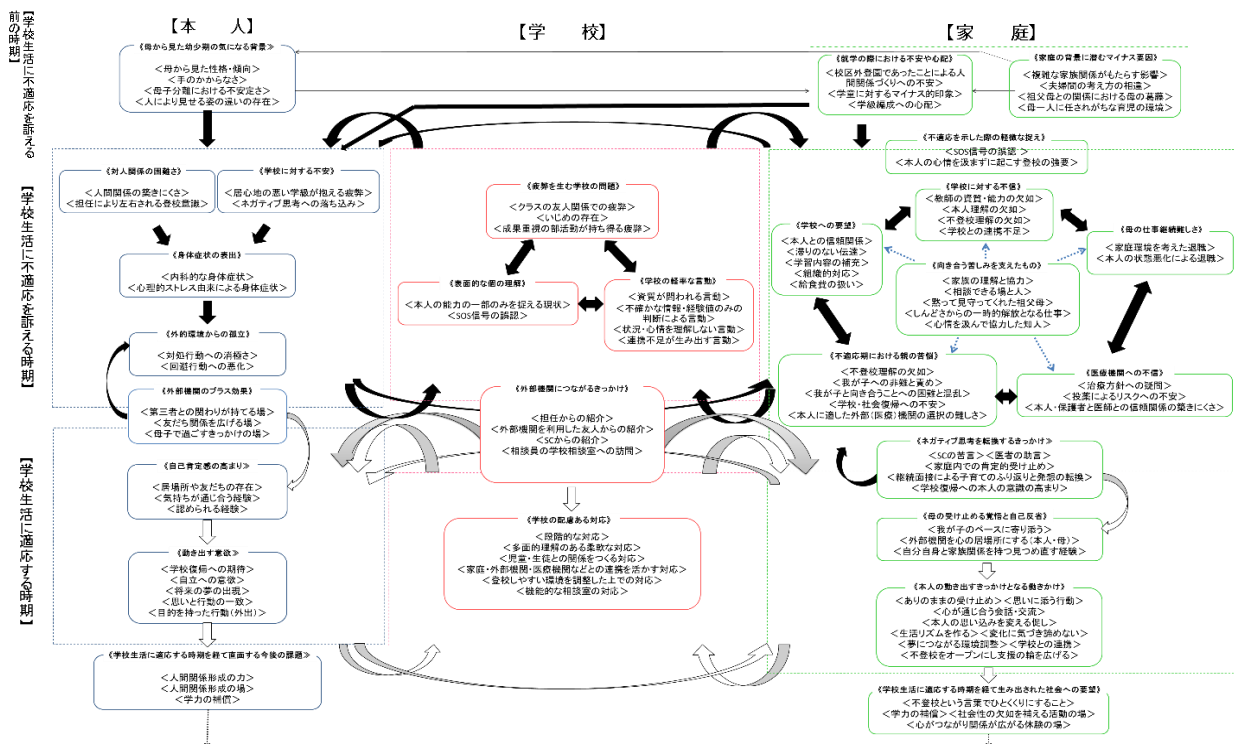


Figure 1 心理・行動の変容過程のモデル図

4 考察

モデル図の作成により、不適応を抱える際には、3つの時期「学校生活に不適応を訴える前

の時期」「学校生活に不適応を訴える時期」「学校生活に適応していく時期」が段階としてあることが理解できた。また、不適応を生み出す背

景・要因は、「幼少期からの家庭環境の問題」「家庭と学校における本人理解のあり方の問題」「学校環境の問題」の三つが導かれたことより、複合的要因であること、不適応を乗り越える鍵となるのは外部機関との連携であることが理解できた。

「幼少期からの家庭環境の問題」とは、複雑な家族関係や夫婦間での考え方の相違などであり、この問題は、本人の性格傾向以上に、学校適応に影響していると言える。従って、家庭環境を確実に捉えて支援を図ることのできる行政の役割が必要である。また、「家庭と学校における本人理解のあり方の問題」は、不適応を訴えた際の家庭の軽微な受け止めにより、混乱していく様相から伺うことができ、本人理解の原点は、家庭であると考え。家庭は、問題行動の根本を家族の問題として捉えること、学校は、集団生活を通して社会性を身に付ける場として、両者ともに多面的理解を心がけることが大切である。そして「学校環境の問題」は、居場所感の得られない学級やいじめの存在に由来している。教師は、学校の中で表出される言動からその真意や背景となるものを理解しようとする努力と、安心して過ごすことができる学校環境を整備していく姿勢が大切である。

一方で、外部機関活用が、不適応を乗り越えるきっかけとなっている。外部機関活用のメリットは、学校では成立しない環境設定ができること、それにより、支援策がより多く生み出されること、第三者が関わることにより本人理解の幅が広がることなど、学校にとっても多数存在する。また、保護者の精神面での支えと、保護者自身が不適応の原因を内なるものへと向ける視点を持つきっかけともなることから、保護者にとってもメリットが多い。不適応を抱えて登校ができない場合、本人の態様に合わせた関わりが可能となる外部環境を選択肢に持つことは必要であると考えられる。登校できない状況に置かれた本人に対して起こる保護者と

学校による抱え込みが、本人は当然のこと、保護者、学校にとっても、しんどさを抱えてしまう、という認識が必要である。

Ⅲ 研究2

1 目的

研究1で得られたモデル図から、不適応を未然に防ぐための支援や対策を検討する。

2 方法

モデル図にあるカテゴリーに対して、学校が果たすべき役割と外部機関が果たすことのできる役割とに整理しながら、それぞれが有する機能を生かした「未然防止策」としてまとめる。

学校生活に不適応を訴える前の時期に配慮しておきたい支援や対策

学校

- ・相談窓口の複数設置と組織的相談体制の確立
- ・生徒指導の3機能を生かした授業づくりと学級づくり
- ・校内体制の中に、「配慮ある対応」を位置づけ、一致した指導対応に心がける

外部機関

- ・各種検診の担当者配置と就学に繋がる基礎資料の作成
- ・幼保小中連携が確実に行われたための連携マニュアルの作成
- ・各種相談窓口の周知のため、就園・就学説明会での担当者紹介と活用目的等の説明

学校生活に不適応を訴える時期に配慮しておきたい支援や対策

学校

- ・外部機関活用のノウハウを理解し、本人の態様に応じて、繋ぐ意識も持つ
- ・「学校いじめ防止基本方針」や「不登校対応マニュアル」など読み合わせと確認、見直し
- ・担任の抱え込みを防ぐ複数教職員の介入
- ・授業、学級経営における指導・対応を常に自

己反省できる機会の設置と、教職員同士で支え合える校内体制・連携の強化

外部機関

- ・毎月の「長期欠席児童生徒の報告」調査を生かした各学校への指導・支援
- ・教育系外部機関の相談員やSCと学校配置のSC、医療機関との連携を必要に応じて行う
- ・医療従事者に対する研修会の開催(学校理解)

学校生活に適應する時期に配慮しておきたい支援や対策

学校

- ・不適應期以上に本人にとって様々な負荷がかかる時という認識を持つ
- ・本人・保護者・外部機関の連携を強化し、本人の思いが行動に結びつくような段階的支援の構築

外部機関（に繋がっている場合）

- ・連携の主体となり、本人や保護者、学校の主体的な動きを引き出す支援の構築
- ・本人の思いを引き出し、その思いに添う働きかけと、本人自身が社会や学校に向かって進んでいるという自覚を促す関わり

IV 総合考察

不登校期の心理・行動の変容過程には、本人、学校、家庭のそれぞれの立場において、段階的な時期の変容を経ることで不適應期を越えていくプロセスが存在していること、さらには、このプロセスは、学校環境に問題があることが明らかとなった。

特に、不適應期の学校、家庭の両者において、マイナスの影響を及ぼす要因が負の循環として膠着してしまう状況が生じていることが理解できた。これは、不適應を訴えた際、家庭、学校の双方がよくない事として捉えてしまうと、両者ともに負の循環が起こり、相互にもマイナスの影響を与える。従って、不適應期には、肯定的な受け止めをすること、本人と同様、家庭も混乱した状況を抱えていることを理解し

た上で、学校は、安心して過ごせる環境を整え、本人のみならず、家庭を支える役目があることを認識することが大切である。

また、不適應の背景・要因は、「幼児期からの家庭環境・家族背景の問題」「家庭と学校における本人理解のあり方」「学校環境の問題」の3つが得られたことで、複合的要因であることが明らかとなった。「幼児期からの問題」は行政や外部機関による早期発見、早期介入が必要である。そして、児童生徒理解は、多角的・多面的理解が必要なこと、家庭と一致協力した体制を築くことが問われていることから、まずは家庭の理解を原点と位置づけ、その上で、学校は、柔軟に多面的に行われることが重要である。さらに、「学校環境の問題」が明らかとなったことより、学校は家庭の問題と片付けるのではなく、学校の問題として捉え、教師自身の資質や、学級・学校経営など、学校内へと問題の目を向け、本人、家族の立場を最も大切にしたい配慮ある対応が行われることが望ましい。

そして、不適應期を乗り越えるきっかけは、外部機関との連携であった。外部機関を有効に活用することは、学校にとって、本人理解の幅や支援策などが広がること、家庭にとっては、家族間の問題として考えるきっかけを生み出すなど、ともに多数のメリットが存在する。学校は、学校では補えない部分で、外部機関の環境と専門的な知見を有効に活用することは有益な事として認識することが必要である。

課題としては、モデル図の妥当性と、外部機関の活用のみが、不適應を乗り越えるきっかけとなるかの検討である。前者については、カテゴリー同士のつながり方や矢印の向きについての吟味は未だ十分ではない。また、後者について、今後、外部機関を利用せずとも再登校や社会復帰を果たした事例を分析することで学校独自の、或いは学校でしかできない支援や対策を提言できるのではないかと思われる。

研究主題 小学校国語科における思考力・判断力・表現力の育成について
～単元を貫く言語活動を設定した説明的な文章の指導の在り方～

要約：金沢市児童は国語科において「『読むこと』を『書くこと』に活用できる力」が十分でないことが全国学力・学習状況調査の結果より明らかになった。その能力を高めるためには説明的な文章教材において単元を貫く言語活動を設定し、「内容をもとに形式を考えていく読み」を「言語活動につながりを持たせる」ことが有効であると仮説を立てた。授業で検証した結果、児童の意欲が向上し、「『読むこと』を『書くこと』に活用できる力」の高まりが確認できた。

キーワード：思考力・判断力・表現力，説明的な文章教材，単元を貫く言語活動

I 研究の背景

平成 24・25 年度全国学力・学習状況調査の国語科において、金沢市の児童は「連続型テキストや非連続型テキストから必要な情報を読み取って自分の考えを書く力」つまり「『読むこと』を『書くこと』に活用できる力」が十分に身につけていないことが分かった。その力を「文章の読み方・書き方といった基礎的な知識・技能を課題解決に活用できる力」であると捉え、本研究における「思考力・判断力・表現力」と定義した。

文献や実践資料を分析した結果、その能力を高めるためには、「単元を貫く言語活動」を設定した説明的な文章教材において、「内容をもとに形式を考えていく読み」を「言語活動につながりを持たせる」ことが有効であると仮説を立てた。

「読むこと」における単元を貫く言語活動について文部科学省は、「無目的に場面ごと、段落ごとに平板に読み取らせる指導を改善することが求められる。すなわち、児童自身にとっての読む目的を明確にして本や文章を選んだり、目的に応じて内容を的確にとらえたり、自分の考えをまとめて交流したりする（中略）」と説明している。

この単元を貫く言語活動を根底に据え、児童の国語力の向上を図るために研究に至った。

II 研究の目的

単元を貫く言語活動設定した説明的な文章教材において「内容をもとに形式を考えていく読み」を「言語活動につながりを持たせて」いくことで、思考力・判断力・表現力が育成できるか、また、その基盤となる学習意欲が向上するかどうかを、授業を通して検証し、考察する。

III 研究の方法

本研究の検証は以下の方法で行った。

1. 研究の対象となる教材の選定
2. 変化を見取るテスト、アンケートの作成
3. 授業、テスト、アンケート結果の考察

IV 研究の結果

1. 研究の対象となる教材の抽出

文献や実践資料より、単元を貫く言語活動が比較的設定しやすい説明的な文章教材である、4年生の「アップとルーズで伝える」と6年生の「『鳥獣戯画』を読む」を抽出した。

2. 変化を見取るテスト、アンケートの作成

読む力の変化を見取るテストの問題として、PISA 調査や平成 24・25 年度全国学力・学習状況調査より「A 文種判断，B キーワード発見，C 要約，D 想像，E 比較，F 細かい関連付け，G 広い関連付け，H 推論，I 内容批評，J 表現批評」

の 10 項目を抽出した。また、意欲面の変化を見取るアンケートも作成した。

これらのテストやアンケートを本研究の対象学級と金沢市内の他の小学校 4 年生、6 年生で実施し、比較できるようにした。

3. 授業、テスト、アンケート結果の考察

まず 4 年生における説明的な文章教材「アップとルーズで伝える」と言語活動教材「リーフレットによる『便利グッズ』の紹介」で、単元を貫く言語活動を設定した授業を行った。

その際に「内容をもとに形式を考えていく読み」を「言語活動につながりを持たせる」ために「分かりやすさ発見！べしべしシート」という自作ワークシートを用いた。

単元を貫く意識

「アップとルーズで伝える」から見つけた「分かりやすい説明の工夫」を使って、「生活便利グッズ リーフレット」を分かりやすく作ろう。

第一次（単元の見通しを持つ）

「生活便利グッズ リーフレット」を作って、便利グッズを紹介しよう。そのために「アップとルーズで伝える」から「分かりやすい説明の工夫」を読み取ろう。

第二次（読む目的を明確にした読み取り）

「アップとルーズで伝える」から「分かりやすい説明の工夫」を読み取り、「分かりやすさ発見！べしべしシート」にまとめていこう。

第三次（知識・技能を活用する言語活動）

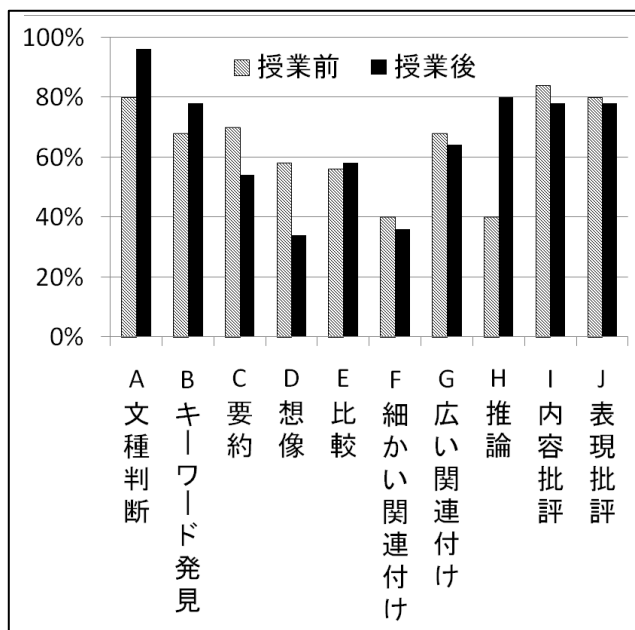
「分かりやすさ発見！べしべしシート」をもとにして、「生活便利グッズ リーフレット」を分かりやすく作ろう。

図表 1 単元を貫く言語活動を設定した単元構成

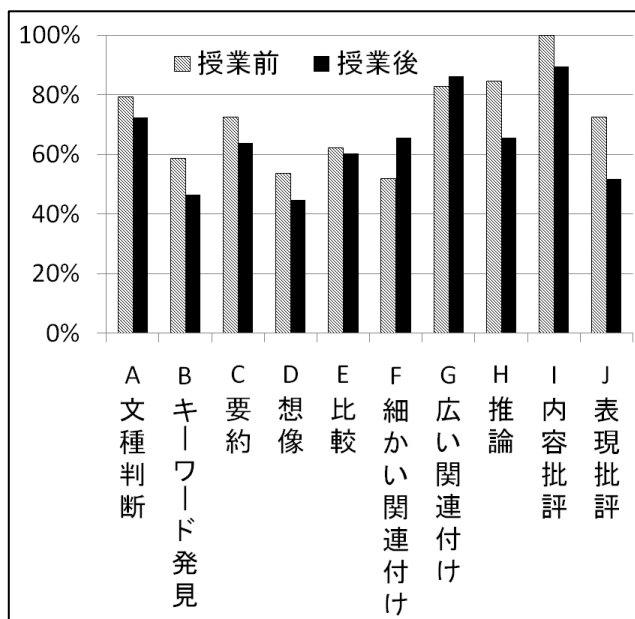
児童は「アップとルーズで伝える」から「読む人に呼びかけるべし、具体例を入れるべし、『このように』でまとめるべし」等、分かりやすい説明の工夫を読み取っていった。それらを一覧にまとめ、活用しながら「生活便利グッズ リーフレット」を書いていった。

その結果、読む能力の変化を見取るテストの他

校との比較で「A 文種判断、B キーワード発見、H 推論、J 表現批評」に顕著な差が見られた。



図表 2 本研究対象学級のテスト結果



図表 3 他校のテスト結果

特に「H 推論」の問題は他校では 18%下がったが、本研究対象学級では 40%上昇した。問題内容は本文の「要旨」を推論するものであった。授業の中で分かりやすい説明の工夫を見つける際に筆者の主張が「このように」とまとめる段落があると学習したことが効果的であったと考える。

また「J 表現批評」の項目が他校は 51%の正答率なのに対し、本実践の対象クラスは 78%の正答率であった。問題内容は本文の表現の工夫を問う

ものであった。実践した授業の中で「分かりやすい説明の工夫」を読み取っていたためと考える。

また、リーフレット作りの際に「読む人によびかける書き方」、「具体例を入れる書き方」、「このように」でまとめる書き方など、形式面での工夫についてどの児童も活用できていた。

意欲面でのアンケート結果も、「国語が好きか」という問いに対し、「どちらかというと思わない」の項目の児童はいなくなり、「とてもそう思う」の児童が30%から60%に上昇した。

これらの4年生の実践より『読むこと』『書くこと』に活用できる力の高まりや意欲面での高まりを確認することができた。

次に6年生における説明的な文章教材『鳥獣戯画』を読むと絵の評論文を書く言語活動教材「この絵、わたしはこう見る」の実践を述べる。

その際に自作ワークシートである「技あり！表現テクニックシート」を用いた。

単元を貫く意識

『鳥獣戯画』を読むから見つけた「技あり！表現テクニック集」を使って「評論文」を書き、展示会をしよう。

第一次（単元の見通しを持つ）

「評論文」を書いて、展示会をしよう。そのために『鳥獣戯画』を読むから「表現テクニック」を読み取ろう。

第二次（読む目的を明確にした読み取り）

『鳥獣戯画』を読むから「表現テクニック」を読み取り、「技あり！表現テクニックシート」にまとめていこう。

第三次（知識・技能を活用する言語活動）

「技あり！表現テクニックシート」をもとにして、「評論文」を上手に書こう。

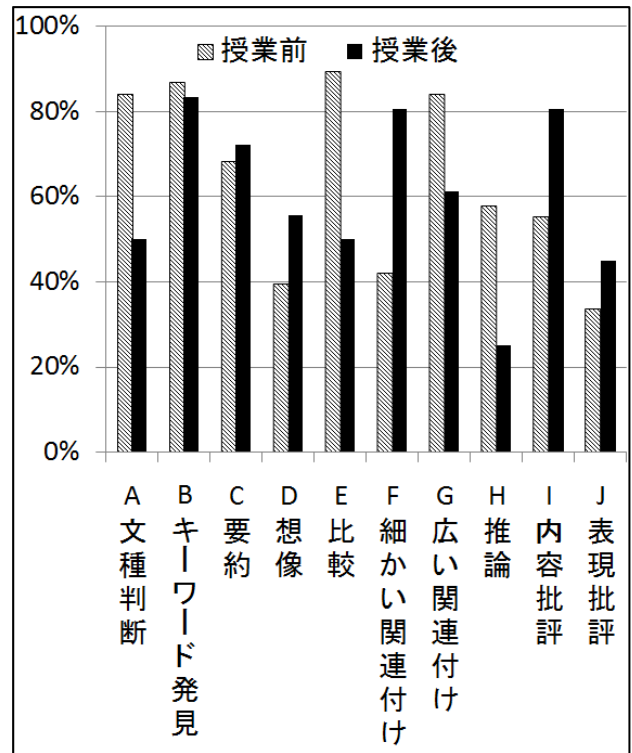
図表4 単元を貫く言語活動を設定した単元構成

児童は『鳥獣戯画』を読むから「書き出しの工夫、実況中継のような書き方、ダッシュ、体言止め、比喩、場面を想像して書く」等の表現の工夫を見つけていった。

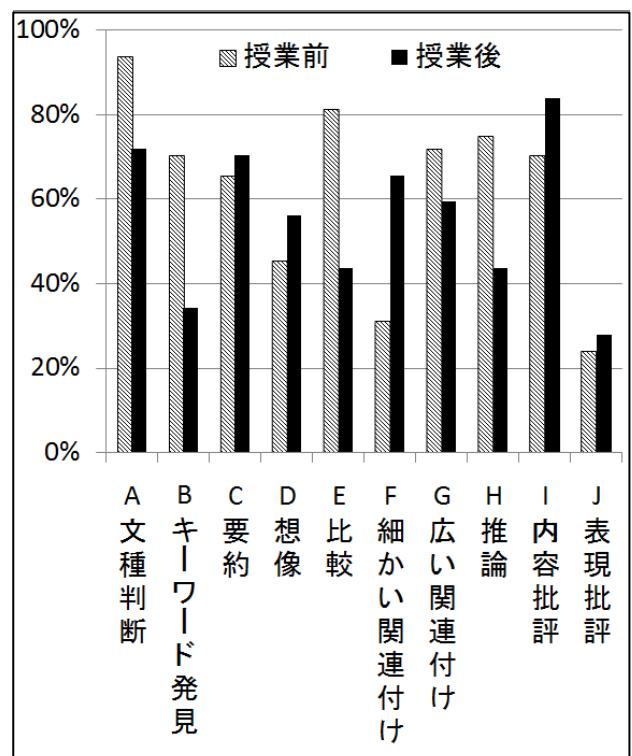
それらをまとめ、活用しながら評論文を書いていった。書きあがった評論文について、同じ絵を

選んだ児童同士読み合い、アドバイスし合った。修正した後、「アートストリート」と名付けて絵と共に廊下に掲示した。

実践の結果、読む能力の変化を見取るテストの「B キーワード発見」において顕著な差が見られた。



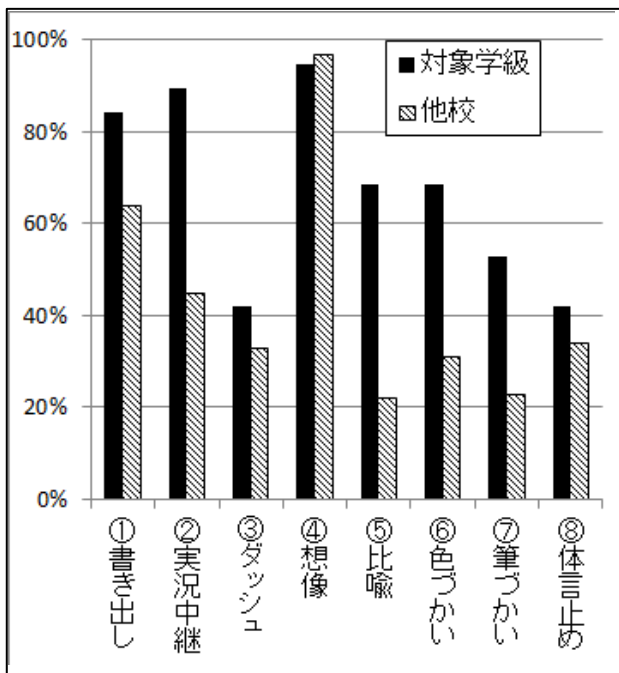
図表5 本研究対象学級のテスト結果



図表6 他校のテスト結果

「B キーワード発見」は、他校は34%の正答率なのに対し、本実践の対象クラスは83%の正答率であった。この問題内容は問題提起の文を書き出すものである。表現テクニックを見つける授業において文という単位の認識や「～だろうか。」という疑問の言葉に着目する言語感覚が高まったためと考える。

また絵の評論文を書いた際には、①書き出しの工夫や⑤比喻等の表現テクニックを用いて書かれてあるものが他校と比べて多かった。



図表7 表現テクニックの使用割合の比較

なお、他校の評論文は、金沢市内の小学校6校を対象に100名分を分析したものである。それらの担任の教師は、『鳥獣戯画』を読み取った後、その表現を生かして評論文を書く言語活動を行っているが、本実践の「技あり！表現テクニックシート」のように「言語活動につながりを持たせる」ためのワークシートは作成していない。

意欲面でのアンケート結果も、「国語が好きか」という問いに対し、「少しそう思う」の項目児童はいなくなり、「とてもそう思う」の児童が26%から57%に上昇した。

授業後にはふりかえりの文章を書く活動を毎時間行った。その中には、次のような意欲面に関する記述が見られた。

- ・書き出しやダッシュや実況中継のようなテクニックを使った評論文を書くのが楽しみです。
- ・体言止めを使うと分かりやすかつこい文章が書けると思う。だから評論文に使ってみたい。

図表8 児童の授業のふりかえり

これらの感想より、第三次の言語活動を設定し、第一次で言語活動を行う見通しを持たせておくことが意欲の高まりにつながる事が分かった。

以上、6年生の実践より『読むこと』を『書くこと』に活用できる力の高まりや意欲面での高まりを確認することができた。

V 研究の成果と課題

成果として、「内容をもとに形式を考えていく読み」を「言語活動につながりを持たせる」ためのワークシートや単元を貫く言語活動を設定した綿密な単元構成により、思考力・判断力・表現力を育成できることが分かった。

また、単元を貫く言語活動の特性として、文章を「目的」を持って読むことと、第三次の言語活動を最終目的として設定することにより、意欲面での高まりが確認できた。学習意欲は思考力・判断力・表現力を高める基盤である。単元を貫く言語の有効性が実証できたと考える。

課題として、実践において文章技巧重視の授業になってしまった点が挙げられる。一番大切なのは自分の思いを「伝えたい」という意欲である。文章技巧は伝えたいことをより良く伝えるための「手段」であり、「文章技巧を使うために書く」という「目的」になってはいけない。単元を貫く言語活動を行う際には、読み取った「形式」を活用することが思考力・判断力・表現力の高まりを生み出すが、「形式」ばかりを強調しすぎてはいけない。自分の思いを大切にし、それを他者に「伝えたい」という意識に持っていく教師の支援が必要であったと考える。

参考文献

- ・文部科学省『言語活動の充実に関する指導事例集 ～思考力、判断力、表現力等の育成に向けて～【小学校版】』、文部科学省、2011年